小学校国語科における学習支援教材の作成
－第56・57次福井県学力調査と平成20・21年度全国学力・学習状況調査結果から－

代　継　香　苗

福井県教育研究所では、平成21年６月より教材研究支援システムの運用を開始した。このシステムは、先生方への教育活動の支援を目的として、教育現場で直接利用できるコンテンツを当所ホームページから配信するものである。

本研究では、第56・57次福井県学力調査と平成20・21年度全国学力・学習状況調査の結果から、小学校国語科における本県児童の課題を整理して、既存の学習支援教材の活用を考えるとともに、高学年向けの新たな学習支援教材「作文ワークシート」を作成した。「作文ワークシート」は、当所ホームページ教材研究支援システムにおいて提供している。

〈キーワード〉　小学校国語科への支援、作文ワークシート、教材研究支援システム

Ⅰ　主題設定の理由

学力調査の本県の分析結果は、速報、リーフレット、報告書等にまとめられ、刊行物として県下小学校に配布されている。それらとは別に、分析で明らかになった課題について、練習・強化できる学習教材を教育現場に提供することができれば、教育支援の一助となるのではないかと考えた。

現在、小学校国語科における学習支援教材として、ホームページに公開されているコンテンツに、「漢字だいすき」「国語ドリル」「慣用句」がある。その中から「国語ドリル」を取り上げ、課題が見られた学習内容について、ドリルを活用した授業づくりを考えた。

また、全国学力・学習状況調査結果における各領域の本県平均正答率を経年比較すると、３領域１事項の中で「書くこと」にやや低い傾向が見られた（図１）。「書くこと」の基礎的・基本的な知識・技能の習得とその確かな定着がより求められている。そこで、「書くこと」の領域において、新たな学習支援教材「作文ワークシート」を作成したいと考えた。

以上の理由により、本主題を設定した。

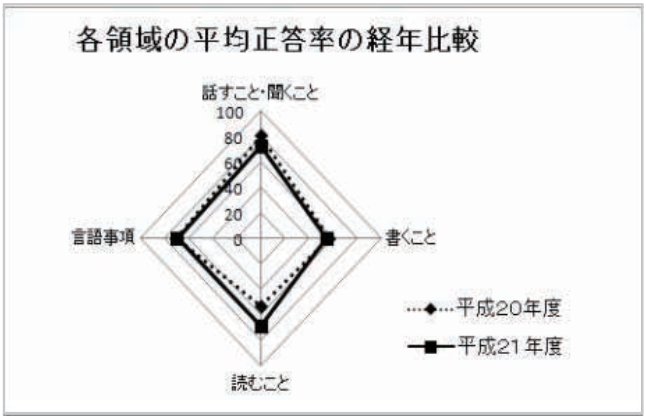


図１　平成20・21年度全国学力・学習状況調査結果における各領域の本県平均正答率の経年比較

Ⅱ　研究の目標

第56・57次福井県学力調査と平成20・21年度全国学力・学習状況調査の結果、明らかになった小学校国語科における課題を基に、学習支援教材を作成し、当所ホームページ教材研究支援システムを通じて県下小学校に提供する。

Ⅲ　研究の方法

１　第56・57次福井県学力調査と平成20・21年度全国学力・学習状況調査の小学校国語科における本県児童の課題を踏まえて、既存の学習支援教材の活用を考えたり、「作文ワークシート」を作成したりする。

(1)　既存の学習支援教材の有用性を考える。

(2)　「国語ドリル」を活用した授業実践を行う。

(3)　「作文ワークシート」を作成する。

２　「作文ワークシート」を当所ホームページ教材研究支援システムを通じて県下小学校に提供する。

Ⅳ　研究の内容

１　第56・57次福井県学力調査と平成20・21年度全国学力・学習状況調査の小学校国語科における本県児童の課題を踏まえて、既存の学習支援教材の活用を考えたり、「作文ワークシート」を作成したりする。

(1)　既存の学習支援教材の有用性

①　「漢字だいすき」について

漢字を正しく読み、書く力は、表現したり理解したりするために必要な基礎的な知識や技能であり、漢字を含む語彙の拡充を図るためにも重要である。また、各教科等の基盤であり、日常生活に欠かせない知識や技能となる。

平成20年度全国学力・学習状況調査の結果、本県の児童は、30問中29問の設問で、正答率が全国平均を上回った。そして、全国に比べて、記述式問題の無解答率も低かった。その一方で、Ａ２―(1)ウ「開場」と解答する設問では、正答率が42.8％と低く、無解答率も13.7％と高かった。この設問は、文脈における意味を考えながら、同音異義の漢字を使い分けて書く問題である。同音異義の複数の漢字の意味を正しくとらえ、文脈に適した漢字を書くことに課題が見られた。

また、第56次福井県学力調査の結果では、「だれにでもシンセツにする」という設問において、正答率が55.3％と低く、無解答率が12.3％と高かった。誤答の多くは「新切」「信切」「親接」と書いており、音のみで判断し、漢字の意味を考えて書くことができなかったと考えられる。

第57次福井県学力調査結果では、漢字の読みの設問「作用する」の正答率が55.5％であった。そのうち、43.3％の児童は、「さくよう」「さくよ」などの誤答を書いていた。漢字の音や訓に関する理解が不十分であったこと、そして日常生活や学習場面で使用頻度が低いこと、使用範囲が狭いことが原因であったと考えられる。

これらの課題を踏まえ、学習した漢字を文脈に合わせて適切に読み、正しく書く力を定着させるために、「漢字だいすき」が有効であると考える(図２)。

「漢字だいすき」は、漢字の読み書きに関するプリントで、第４学年は20枚、第５学年は25枚、第６学年は30枚からなる。(解答付き)。

問題は、平成13・15年度の小学校教育課程実施状況調査、平成16年度特定の課題に関する調査（国語）から抜粋したもので、誤りやすい漢字や使用頻度の低い漢字が、意図的に取り上げられている。

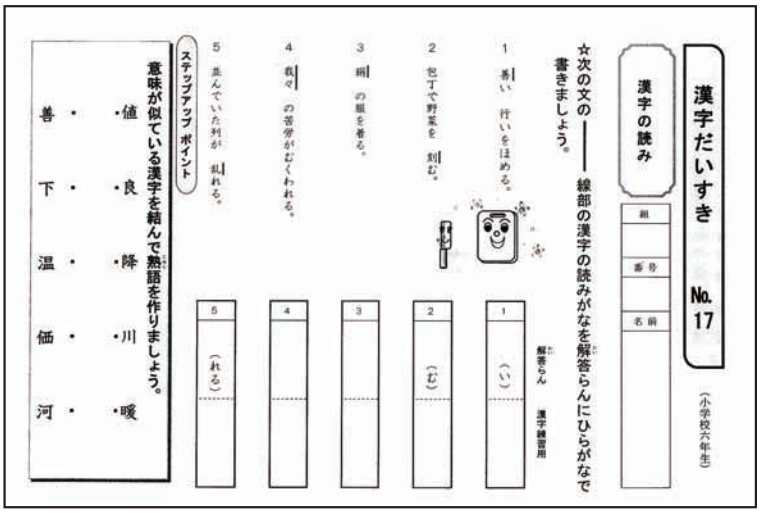


図２　漢字だいすき（第６学年№17）

１枚あたりの設問数は、ステップアップポイントを含めて５～７問である。ステップアップポイントとは、言葉遊びを取り入れた発展的な内容のことで、「カードが６まいあります。２まいずつ組み合わせて、３つの熟語を作りましょう」「□に漢字を入れて、２字熟語を４つ作りましょう」など、楽しみながら学習できるようになっている。

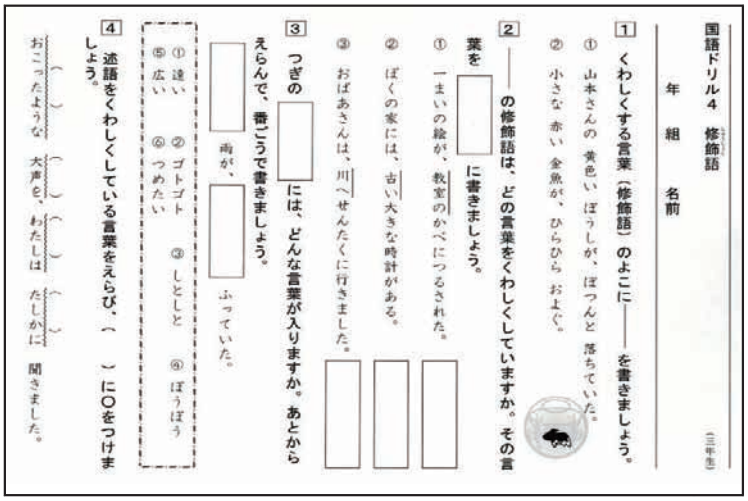
② 「国語ドリル」について

第56・57次福井県学力調査では、２か年連続で、漢字の正しい成り立ちを指摘する設問において課題が見られた。第56次では、形声文字である「粉」と同じ成り立ちの漢字を四つの選択肢から選ぶ問題であった。選択肢別の出現率（%）を見ると、①「明」は24.6%、②「林」は5.8%、③「飯」は58.9%（正答）、④「計」は6.3%であった。第57次では、「持」と同じ成り立ちの漢字を選ぶ問題で、①「門」は2.3%、②「鳴」は21.4%、③「信」は21.8%、④「板」は44.5%（正答）であった。誤答に、会意文字を指摘する児童が多く見られた。以上の調査結果から、表意文字としての漢字の由来や組立てに関する理解が低い傾向があること、特に、会意文字と形声文字の理解が不十分であることが分かった。

また、国語辞典に載っている語句の順を指摘する設問においても、正答率が51.1%と低かった。国語辞典の使い方や語句の配列を正しく理解することに課題が見られた。

平成20年度全国学力・学習状況調査結果では、問題Ａ３の正答率が30.9%と低く、全国平均を下回った。この設問は、文の構成や表現の効果を確かめ、正しく推敲することができるかどうかをみる問題である。

内容は、「書くこと」「言語事項」の２つの領域にまたがるが、特に、修飾と被修飾との関係、文の中での語句の係り方や照応の仕方等の文の構成に関すること、また、語句や文の一つ一つが適切であるかを感じ取ることが十分でないと考えられる。


国語ドリル４　修飾語

年　組　名前

（三年生）

1 くわしくする言葉（修飾語）のよこに――を書きましょう。

① 山本さんの 黄色い ぼうしが、ぽつんと 落ちていた。

② 小さな 赤い 金魚が、ひらひら およぐ。

2 ――の修飾語は、どの言葉をくわしくしていますか。その言葉を□に書きましょう。

① 一まいの絵が、教室のかべにつるされた。

② ぼくの家には、古い大きな時計がある。

③ おばあさんは、川へせんたくに行きました。

3 つぎの□には、どんな言葉が入りますか。あとからえらんで、番ごうで書きましょう。

□雨が、□ふっていた。

① 強い　② ゴトゴト　③ しとしと　④ ぼうぼう　⑤ 広い　⑥ つめたい

4 述語をくわしくしている言葉をえらび、（　）に○をつけましょう。

おこったような（　）大声を、（　）わたしは（　）たしかに（　）聞きました。

図３　国語ドリル（第３学年№.４「修飾語」）

言語事項の内容は、国語による表現力と理解力の基礎であり、児童の実態に即して、その内容を螺旋的・反復的に繰り返し学習することが大切である。その学習に「国語ドリル」は有効である。

「国語ドリル」は、第１学年から第６学年までを対象に、県内で使用されている教科書（光村図書）に準拠して作成されたプリントである(図３)。１枚あたりの設問数は５～15問あり、10分程度で学習できるようになっている。(解答付き)。

作成委員には小学校の先生方にも加わってもらい、低・中・高学年それぞれ４～５名ずつのチームで内容が検討された。言語における知識・理解・技能の学習内容について、単元名を挙げて（表１）、児童がつまずきやすい内容はどの部分か、そのつまずきを補完するために、どのような問いを作るとよいかなどを話し合い、授業の中での活用を視野に入れて作成された。

〈第５学年の場合〉光村図書

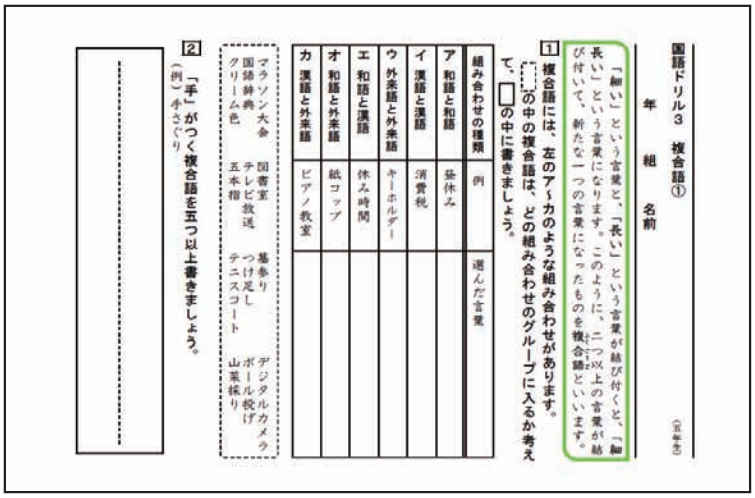
教科書	単元・教材名（言語事項）	作成枚数	
５年上	漢字の成り立ち	1	計10枚
	お願いの手紙、お礼の手紙	1	
	敬語	1	
	仮名づかいの決まり	1	
	カンジー博士の暗号解読	1	
	和語・漢語・外来語	1	
５年下	言葉の組み立て	2	
	漢字の読み方と使い方	1	
	同じ読み方の熟語	1	

〈第６学年の場合〉光村図書

教科書	単元･教材名(言語事項)	作成枚数	
６年上	漢字の形と音・意味	2	計10枚
	暮らしの中の言葉	2	
	同じ訓をもつ漢字	2	
	日本で使う文字	2	
６年下	熟語の成り立ち	2	

表１　ドリルを作成した単元・教材名（第５・６学年の場合）

また、中には、冒頭部分に簡単な説明を加えたものもある(図４)。例えば、第５学年のドリル「複合語①」では、複合語について、「『細い』という言葉と、『長い』という言葉が結び付くと、『細長い』という言葉になります。このように、二つ以上の言葉が結び付いて、新たな一つの言葉になったものを複合語といいます。」と、児童にとって理解しやすい表現で解説してある。語句の構成に関する理解を促し、語彙を豊かにすることがねらいである。


国語ドリル３　複合語①

年　組　名前

「細い」という言葉と、「長い」という言葉が結び付くと、「細長い」という言葉になります。このように、二つ以上の言葉が結び付いて、新たな一つの言葉になったものを複合語といいます。

1 複合語には、左のア～カのような組み合わせがあります。□の中の複合語は、どの組み合わせのグループに入るか考えて、□の中に書きましょう。

組み合わせの種類	例	選んだ言葉
ア 和語と和語	昼休み	
イ 漢語と漢語	消費税	
ウ 外来語と外来語	キーホルダー	
エ 和語と漢語	休み時間	
オ 和語と外来語	紙コップ	
カ 漢語と外来語	ピアノ教室	

2 「手」がつく複合語を五つ以上書きましょう。
（例）手さぐり

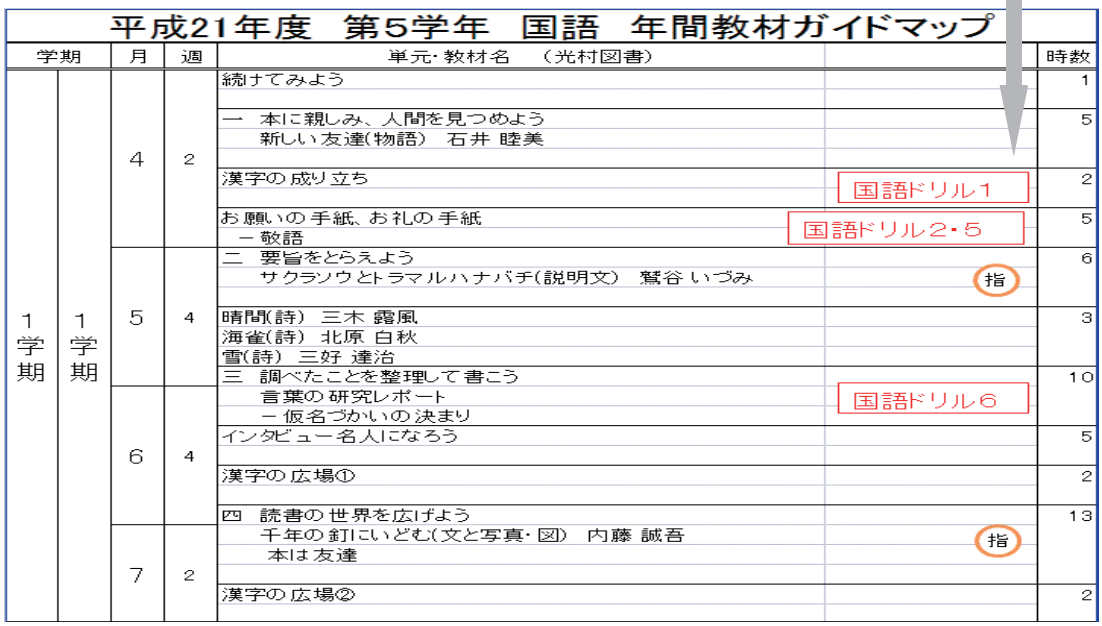
マラソン大会　図書室　デジタルカメラ
国語辞典　テレビ放送　墓参り
クリーム色　五本指　つけ足し　ボール投げ
テニスコート　山菜採り

図４　簡単な説明書きを加えた国語ドリル
（第５学年№３「複合語①」）

単元の学習後、あるいは学期末など、既習事項を復習したい場合にも活用することができる。

その際、「年間教材ガイドマップ」を利用すると便利である。「年間教材ガイドマップ」とは、教材研究支援システムに掲載している教材や指導案をどの単元において活用するかを案内するもので、教材等と同時に、教材研究支援システムに公開している。

「国語ドリル」を活用できる単元においては、「年間教材ガイドマップ」の単元・教材名の項目内に「国語ドリル」のナンバーを赤字で併記してある（図５）ので、ガイドマップを利用すれば、単元で活用できるドリルの有無やどの単元で活用するのかが一目で分かる。


平成21年度　第5学年　国語　年間教材ガイドマップ

学期		月	週	単元・教材名　（光村図書）		時数
1学期	1学期	4	2	続けてみよう		1
				一　本に親しみ、人間を見つめよう 新しい友達(物語)　石井 睦美		5
				漢字の成り立ち	国語ドリル１	2
				お願いの手紙、お礼の手紙 －敬語	国語ドリル２・５	5
		5	4	二　要旨をとらえよう サクラソウとトラマルハナバチ(説明文)　鷲谷 いづみ	指	6
				晴間(詩)　三木 露風 海雀(詩)　北原 白秋 雪(詩)　三好 達治		3
		6	4	三　調べたことを整理して書こう 言葉の研究レポート －仮名づかいの決まり	国語ドリル６	10
				インタビュー名人になろう		5
				漢字の広場①		2
		7	2	四　読書の世界を広げよう 千年の釘にいどむ(文と写真・図)　内藤 誠吾 本は友達	指	13
				漢字の広場②		2

図５　年間教材ガイドマップ（第５学年）の一部

③　「慣用句一覧表」「慣用句ワークシート」について

平成23年度から全面的に実施される新学習指導要領では、我が国の言語文化を小学校から取り上げて親しむことをねらいとして、低学年では昔話や神話・伝承、中学年では短歌や俳句、慣用句や故事成語、高学年では古文・漢文などを取り上げて指導するよう明示している。

中学年の指導事項に焦点をしぼると、第３学年及び第４学年の〔伝統的な言語文化と国語の特質に

関する事項〕の中で、「長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと」と示されている。

これを受けて光村図書では「平成21・22年度小学校『国語』移行措置資料」において、現行教科書の単元の扱いに、新しい学習活動・指導内容を組み込む提案や、現行教科書にない材料を用いて、新たな学習を展開する提案を行った。例えば、第３学年の「いろはがるたで遊ぼう」では、「いろはがるた」に書かれていることわざの意味を知り、音読して親しむことを目標として、ことわざに興味・関心をもたせる活動を新しく取り上げている。第４学年の「言葉遊びの世界」では、昔から受け継がれてきた言葉で言葉遊びをして、味わいやおもしろさなど言葉のよさを知り、使うことができることを目標に、ことわざや慣用句、故事成語を扱った活動を組み込んでいる。

また、平成19～21年度全国学力・学習状況調査の調査問題文を調べたところ、「下手の横好き」「いくじのない」「気が合う」「声をかける」「手間がかかる」「気を配る」「顔を出す」「相談にのる」「ため息をつく」等のことわざや慣用句が、本文中に登場している。

先人の知恵や教訓、機知に触れ、それらの言葉の意味を学習すること、そして、学習した言葉を日常生活に用いることで、言語生活をより豊かにすることが求められている。長い歴史の中で継承されてきた自国の文化を尊重する態度の育成にもつながり、重視されるべき学習内容であろう。

慣用句の指導をする際、効果的な支援教材がある。「慣用句一覧表」と「慣用句ワークシート」である。「慣用句一覧表」は、小学校第１学年から中学校第３学年までの360の慣用句を取り上げ、慣用句の読み、意味、用例、教科書名、学年、教材名を示したコンテンツである。「五十音順慣用句一覧表」と「分類別慣用句一覧表（図６）」の２種類がある。

「慣用句ワークシート」は、「慣用句の日めくりを作ろう（図７）」「慣用句を使った『かるた』を作ろう」「身の回りから慣用句を集めよう」「テーマを決めて慣用句を調べよう」「慣用句を使って４コマまんがを作ろう」の５枚からなる。学級でカレンダーや４コマまんが集を作る言語活動を通して、慣用句の意味を知り、使いながら、言葉についての興味をさらに深めることができると考える。

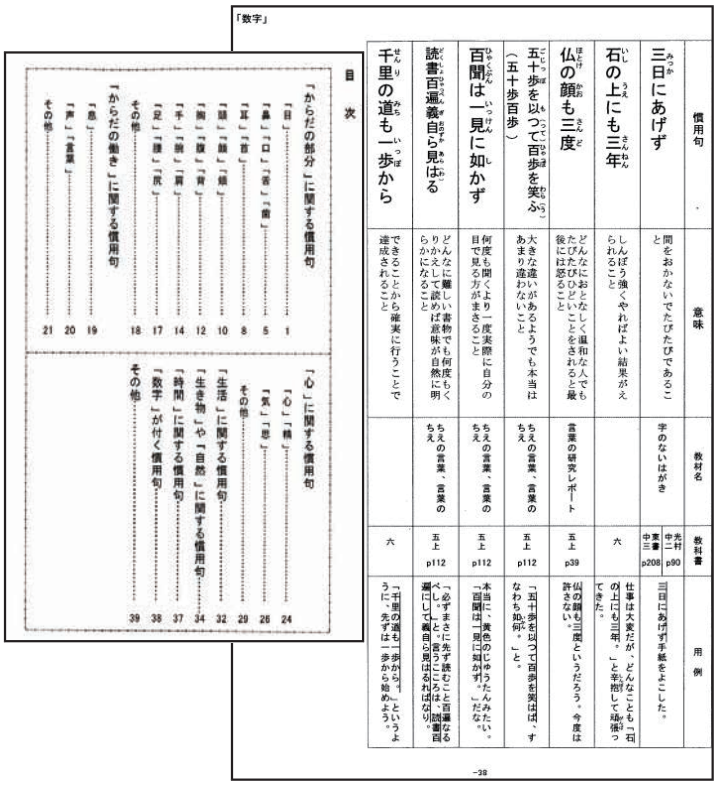


図６　分類別慣用句一覧表

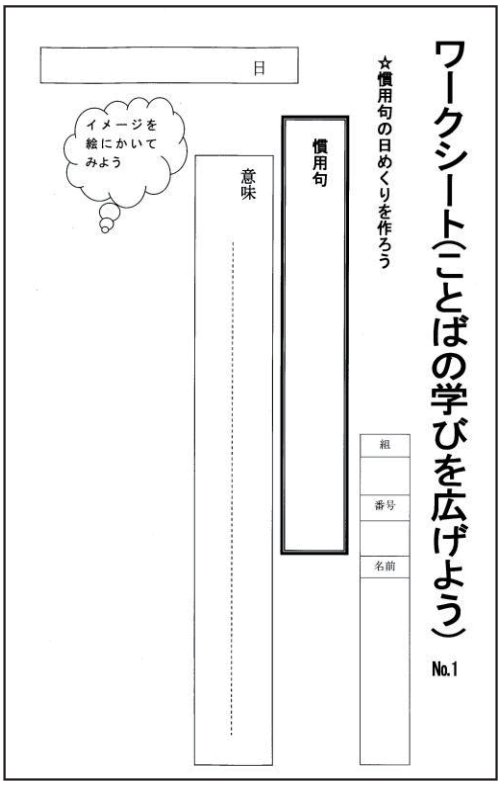


図７　慣用句ワークシート（No.１）

(2)　「国語ドリル」を活用した授業実践

〈対象〉福井市鷹巣小学校　第５学年

〈授業者〉吉田晴美　教諭

〈単元・教材名〉「漢字の成り立ち」

〈目標〉漢字の由来について理解することができる。

〈授業の概要〉

・前時で学習した象形・指事・会意・形声文字の４種類の漢字の成り立ちについて、児童が発表する。

・「国語ドリル」№.１（図９）に取り上げられている漢字について、その成り立ちを児童が予想する。

・実際に漢字辞典を使って確かめる。

図８　学習のようす

〈考察〉

(1)②で述べたように、第56・57次福井県学力調査において、課題であった学習内容である。

授業には、「第56次福井県学力調査報告書」の「教科別調査結果の考察と指導上の改善」にある「興味・関心を高める漢字学習」の内容を取り入れた。

漢字に対する興味・関心を高め、主体的に学習する態度を育てるために、授業者の工夫が随所で見受けられた。その工夫点を以下に述べる。

・下学年での既習事項を想起させ、漢字が表意文字であることを再確認しながら学習を進めた。

・「象形文字」「指事文字」については、イメージが膨らむように、簡単なイラストを字形の横に板書した。

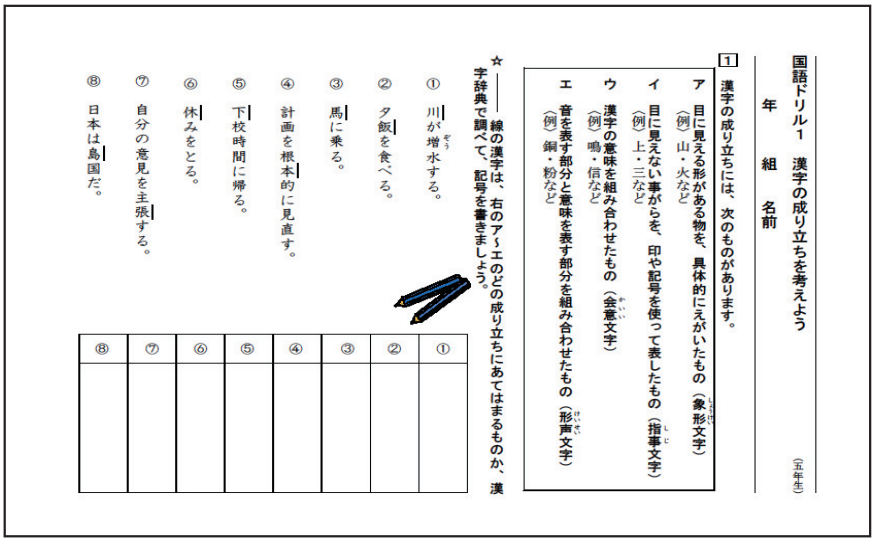
・「会意文字」「形声文字」については、教科書に立ち戻って考えるよう助言し、机間支援をして個別に指導を行った。

・漢字辞典を手元に置かせ、児童がいつでも意味や成り立ちを調べられるようにした。

・国語ドリルの解答欄には、ア～エの記号ではなく、「象形」「指事」「会意」「形声」と記すように促した。

・２時間配当の学習内容であるが、時数を１時間増やして力の定着に努めた。

実際に、漢字辞典で調べ確かめる活動では、「予想的中でした。」と大きい声で発表する児童が続き、楽しみながら学習に励む姿が見受けられた。漢字がどのように形成され継承されてきたのか、表意文字としての漢字の特質について理解する学習を丁寧に行った実践であった。



国語ドリル１　漢字の成り立ちを考えよう（五年生）

年　組　名前

1　漢字の成り立ちには、次のものがあります。

ア　目に見える形がある物を、具体的にえがいたもの（象形文字）
（例）山・火など

イ　目に見えない事がらを、印や記号を使って表したもの（指事文字）
（例）上・三など

ウ　漢字の意味を組み合わせたもの（会意文字）
（例）鳴・信など

エ　音を表す部分と意味を表す部分を組み合わせたもの（形声文字）
（例）銅・粉など

☆――線の漢字は、右のア～エのどの成り立ちにあてはまるものか、漢字辞典で調べて、記号を書きましょう。

① 川が増水する。
② 夕飯を食べる。
③ 馬に乗る。
④ 計画を根本的に見直す。
⑤ 下校時間に帰る。
⑥ 休みをとる。
⑦ 自分の意見を主張する。
⑧ 日本は島国だ。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧

図９　国語ドリル（第５学年№.１「漢字の成り立ちを考えよう」）

(3)　「作文ワークシート」の作成

平成21年度全国学力・学習状況調査の結果、Ｂ１二「報告文のまとめとして、調べて分かったことを80字以上100字以内にまとめて書く」設問において、課題が見られた。報告文を書く目的に応じて、調べて分かった結果と調べた理由とを関係付けて書くことができるかどうかをみる記述式の設問である。正答率は21.9%、無解答率は6.9%であった。

この設問は、正答の条件が３つあるが、本県の場合、２つ目の条件を満たすことができなかった児童が69.6%いた。その条件とは「第一小学校の６年生の調査でも記事に書かれていた全国の６年生の調査と似たような傾向が見られたことについて触れている」という内容である。つまり、全国の６年生の50メートル走平均タイムの変化と第一小学校の６年生の平均タイムの変化とを関係付けて、字数などの条件に即して書く力が、十分に身に付いていなかったと考えられる。

また、国語Ｂ正答率と学校質問紙36「児童が自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をしていますか」との相関を調べた結果、本県の場合、「行った」学校と「あまり行っていない」学校間で、正答率差が約４%あることが分かった（図10）。

自分で調べたことや考えたことを文章に書かせる指導を継続的に行うことによって、書く力だけでなく、児童の「知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力」が育成されると考えられる。

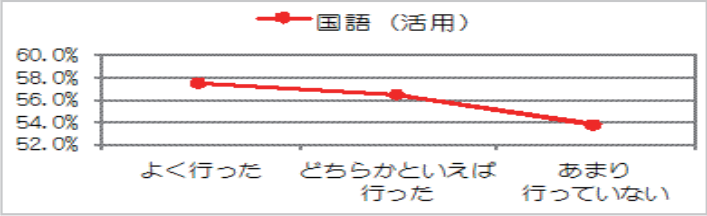


図10　国語Ｂと学校質問紙36「児童が自分で調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導をしていますか」との相関から分かった選択肢別平均正答率

次に、第56次福井県学力調査の結果では、四（四）（２）②「自分の考えを効果的に伝えるために、具体的な内容を加えて書く」設問の正答率が37.1%と低く、無解答率は11.9%であった（図11）。

誤答を書いた34.5%の児童は、書き出しで選んだ「読書のよさ」に関する体験を具体的に書くことができず、5.7%の児童は、書き出しの内容と体験の内容とを結び付けて書くことができなかった。その中には、「情報」「想像」「体験」等、書き出しの文中の言葉をそのまま抜き出して書いている児童も目立った。選んだ書き出しの文に続けて、自身の読書体験等の内容も加え、自分の考えを効果的に書く力が十分に身に付いていなかったと考えられる。

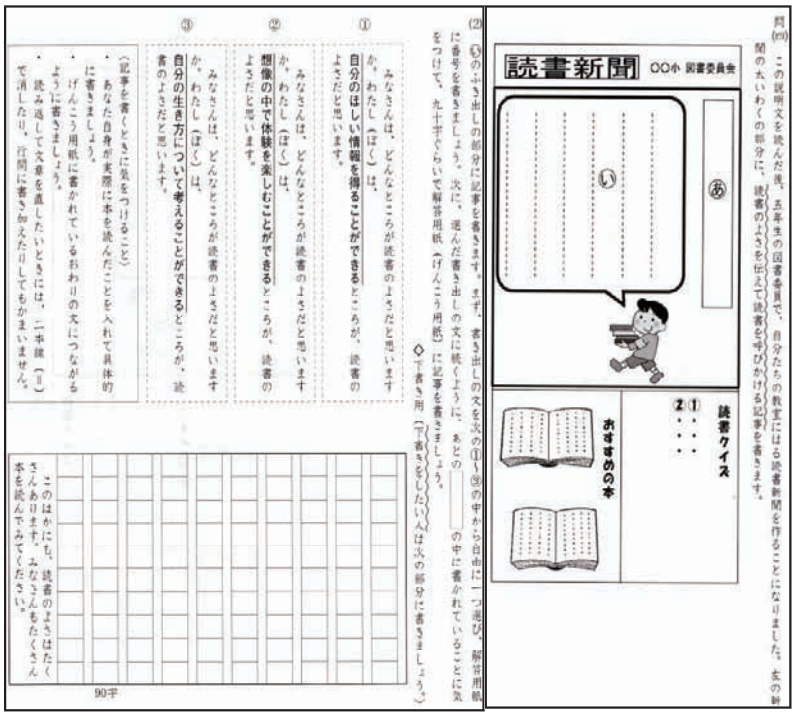


図11　第56次福井県学力調査問題 四（四）（２）②

以上のことから、自分の意見の根拠となった事実と、自分の意見そのものとを区別して書く力、様々な目的や条件に応じて書く力を高める必要があると考え、高学年向けの新たな学習支援教材「作文ワークシート」を作成した。

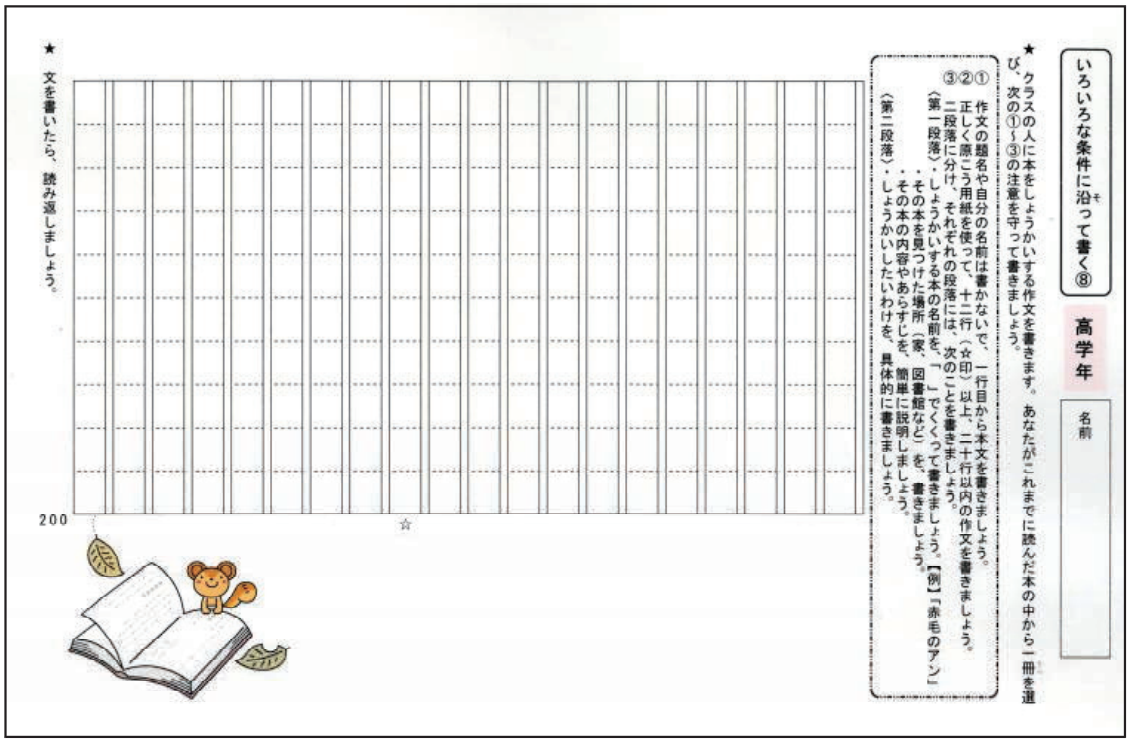
「作文ワークシート」は、小学校第５・６学年対象の作文練習用プリントで、児童用16枚、教師用16枚からなる。第38次から第54次までの福井県学力調査の設問から抜粋した内容で構成されている。

児童用シート（図12）は、一つの課題（題材）について、複数の条件を満たしながら、文章を書くプリントである。児童にとって身近でかつ個人差が生じにくい課題を設定し、児童が自分の意見やその根拠をもちやすいように、課題状況を提示した上で、それに対する意見を記述させる内容になっている。また、条件は「二段落に分けて、第一段落には自分の考え（賛成か、反対か）を書きましょう」「第二段落には、そう考える理由を考えて書きましょう」等、具体的に示した。

教師用シート（図13）には、児童の作文を評価する際の観点を、正答・誤答それぞれの場合に分けて挙げた。観点は「自分の体験や思いを文章に書くことができる」「正しく改行して書くことができる」等、３～８つ挙げてある。それらの観点によって、教師は、一定の基準に即し、児童の作文を評価することができる。そして、書く力における児童一人ひとりの到達度やつまずきを知り、個々に応じた指導を返すこともできる。また、推敲の際に、このシートを提示して、児童自ら自己評価をしたり、友達と相互評価をしたりする学習に活かすことも可能である。

平成18年７月、国立教育政策研究所教育課程研究センターは、第４～６学年対象に行った「特定の課題に関する調査（国語）」の「長文記述に関する調査」の分析結果をまとめた。そして、長文の記述力を育成するために、「条件や課題に合わせた長文記述の学習」「自分の考えや意見を明確に伝える学習」「自分の考えを高めるための取材の学習」「文章様式に合わせた構成の学習」「事象と感想・意見とを区別した記述の学習」「書くことに慣れさせるための学習」の６つの指導上の改善を提示した。その中で、「長時間をかけた指導のみならず、限られた時間内でもひとまとまりの文章を書き上げることができるような指導を繰り返し行う」「字数、相手など与えられた条件に即応して構想するといった記述の指導を充実させていく」指導の大切さを論じている。

「作文ワークシート」に取り組む際は、予め時間を制限して書かせたり、定期的に継続して書かせたりすることがより効果的であろう。


いろいろな条件に沿って書く⑧　高学年

名前

★クラスの人に本をしょうかいする作文を書きます。あなたがこれまでに読んだ本の中から一冊を選び、次の①～③の注意を守って書きましょう。

①作文の題名や自分の名前は書かないで、一行目から本文を書きましょう。
②正しく原こう用紙を使って、十二行（☆印）以上、二十行以内の作文を書きましょう。
③二段落に分け、それぞれの段落には、次のことを書きましょう。

〈第一段落〉・しょうかいする本の名前を、「　」でくくって書きましょう。【例】「赤毛のアン」
・その本を見つけた場所（家、図書館など）を、書きましょう。

〈第二段落〉・しょうかいしたいわけを、簡単に説明しましょう。
・その本の内容やあらすじを、具体的に書きましょう。

★文を書いたら、読み返しましょう。

200

☆

図12　作文ワークシート（№８児童用）

いろいろな条件に沿って書く⑧　高学年　正答・誤答表

次の八つの観点で評価する。

	正答	誤答
1	・所定の量の文章を書くことができる。 ・十二行以上書かれている。	・十一行以下。 ・二十行以上。
2	・正しく改行して書くことができる。 ・正しく改行されている。	・冒頭の一字下げができていない。 ・改行の一字下げができていない。 ・段落の数が誤っている。 ・段落意識がない。
3	・正しく句読点や「」を使用することができる。 ・正しく句読点や「」が使用できている。	・文末の句点を一箇所忘れている。 ・句読点や「」が一字分扱いしていない。 ・句読点や「」の位置が不適当。
4	・主語と述語を呼応させて書くことができる。 ・主語と述語の呼応が適切である。	・主語と述語が呼応していない所が一箇所以上ある。
5	・「」でくくって、本の名前を書くことができる。 ・「」でくくって本の名前が書いてある。	・本の名前が「」でくくってない。 ・本の名前が書かれていない。
6	・紹介する本を見つけた場所を書くことができる。 ・本を見つけた場所を書いてある。	・本を見つけた場所が書かれていない。
7	・紹介する本の内容や粗筋を書くことができる。 ・本の内容や粗筋が適切に書いてある。	・本の内容や粗筋が適切でない。 ・本の内容や粗筋が書かれていない。
8	・紹介する本のよさを具体的に書くことができる。 ・本のよさが具体的に書いてある。	・よさの説明が具体性に欠ける。 ・よさが書かれていない。

（福井県教育研究所「福井県学力調査第45次報告（平成８年度実施）」より）

図13　作文ワークシート（№８教師用）

２　「作文ワークシート」を当所ホームページ教材研究支援システムを通じて県下小学校に提供する。

今年度、当所のホームページ（http://www.fukui-c.ed.jp/~fec/）に教材研究支援システムが設けられ、ＩＤとパスワードを使ってシステムに入り、利用することができるようになった。

「作文ワークシート」は、ダウンロードして印刷したものをそのまま活用することができる。また、一太郎のワープロソフトで作成してあるので、ダウンロードしたファイルを基に、学級の実態に応じて、自由に加工し、活用することも可能である。

Ⅴ　研究のまとめ

１　研究の成果

本研究は、第56・57次福井県学力調査と平成20・21年度全国学力・学習状況調査における結果分析を、学校現場に役立つ形で返すことはできないだろうかという考えが始まりだった。役立つ形とは、教師の個別指導や学習指導に有効なもの、かつ、それらの指導を通して、児童に直接的に還元できるものという意味である。

分析から見えた本県児童の課題を基に、既存の学習支援教材の活用を考えたり、高学年向けの新たな学習支援教材「作文ワークシート」を作成したりした。「作文ワークシート」は、児童の記述力の育成に効果的であるとともに、作文の評価を適切に行うことができるという点で、大変有効である。当所ホームページ教材研究支援システムにおいて提供しているので、今後の活用を期待するとともに、活用の結果どうであったか、多くの情報を得られたらよいと考えている。

２　今後の課題

国語教材プリントの活用状況を調べるため、平成21年10月末、小学校国語科（Ⅱ）研修講座の受講者に対して、次のような質問内容でアンケート調査を行った。受講者37名のうち33名から回答を得た。

（回答率89%）

（質問内容）
教材研究支援システムを知っていますか。

アンケート調査の結果、76%の教員が「知っている」と回答した。教材研究支援システムの認知度は高いということが分かる（図14）。

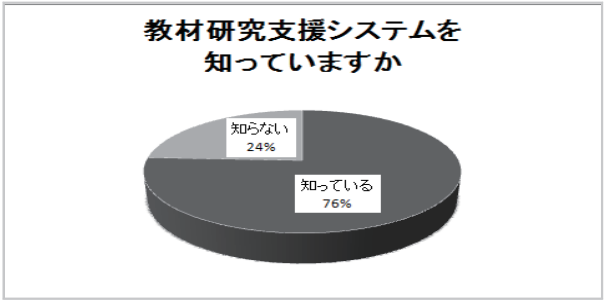


図14　教材研究支援システムの認知の割合

（質問内容）
システム内の国語教材プリントを活用したことがありますか。

「活用したことがない」と回答した教員は91%、「活用したことがある」と回答した教員は９%であった。認知度の高さに反して、活用度は低いということが分かる（図15）。

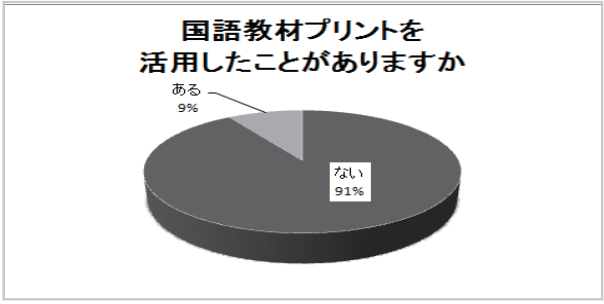


図15　国語教材プリントの活用の割合

学習支援教材の活用度を高めるには､実際に使っていただいた学校現場の意見を反映させるなどして、内容の工夫改善を図り、よりよいものにしていくことが必要であろう。また、新学習指導要領を踏まえて、学年変更になった内容や新たに取り上げられることになった内容に対応した教材づくりも充実させる必要がある。

最後に、本研究の実施にあたり、福井市鷹巣小学校の吉田晴美先生、永平寺町志比小学校の舟岡いずみ先生、あわら市金津小学校の山下久美子先生には、御多忙の中、研究協力員として多大なるご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

《引用文献》

○文部科学省『小学校学習指導要領』p. 23
○国立教育政策研究所（2006）『特定の課題に関する調査（国語）調査結果（小学校・中学校）』pp. 41-42

《参考文献》

○光村図書（2004）『小学校国語』５年
○光村図書（2008）『平成21･22年度小学校「国語」移行措置資料付「学習材例」』
○文部省（1999）『小学校学習指導要領解説』東洋館出版社
○文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説』東洋館出版社
○国立教育政策研究所（2008）『平成20年度全国学力・学習状況調査解説資料小学校国語』
○国立教育政策研究所（2009）『平成21年度全国学力・学習状況調査解説資料小学校国語』
○福井県教育委員会（2008）『平成20年度全国学力・学習状況調査結果分析資料』
○福井県教育研究所（1990-2009）『第38次～第57次福井県学力調査報告書』